

大変形ひずみ解析に基づく特発性側弯症の発生メカニズムの 解明に関する研究

350804176 小倉 章弘

論文要旨

数値解析による病理解明は、通常、仮説に基づいて行われる。しかし、仮説に基づく解析では疾患が現れない場合、正常モデルと疾患モデルを作成し、両者間の写像を求めて、その解析を通して仮説を立てるアプローチが考えられる。

本研究では、特発性側弯症の成因解明を目指して、正常な脊柱から側弯形態への参照変位が与えられたとき、正常なモデルから疾患モデルへの写像を求める問題を構成し、その数値解法を示した。その問題は次のようにかける。

変位誤差ノルム最小化問題: $\Omega \in \mathbb{R}^3$ を正常モデルの固定領域、ある固定部分境界 $\Gamma^1 \subset \partial\Omega$ に対して、 $\mathbf{T}: \Gamma^1 \rightarrow \Gamma_{\text{scol}}$ を医療データから与えられた写像、 $\mathbf{u}^1 = \mathbf{T} - \mathbf{I}$ (\mathbf{I} は恒等写像) を参照変位とする。このとき、

$$\min_{(\phi, \mathbf{u}) \in \Phi \times U} \left\{ J(\mathbf{u}) = \int_{\Gamma^1} \alpha |\mathbf{u}^1 - \mathbf{u}|^2 d\gamma \mid \int_{\Omega} \mathbf{S}(\phi, \mathbf{u}) \cdot \delta \mathbf{E}(\mathbf{u}, \mathbf{v}) dX = \int_{\Gamma^1} \alpha (\mathbf{u}^1 - \mathbf{u}) \cdot \mathbf{v} d\gamma \quad \forall \mathbf{v} \in U \right\}$$

を満たす密度 ϕ と変位 \mathbf{u} を求めよ。ただし、 $\Phi = \{ \phi \in W^{1,\infty}(\Omega; \mathbb{R}) \mid 0 < \phi_0 \leq \phi \leq \phi_1 \}$, ϕ_0, ϕ_1 は正定数, $U = \{ \mathbf{u} \in H^1(\Omega; \mathbb{R}^d) \mid \mathbf{u} = \mathbf{0} \text{ on } \Gamma_0 \}$, $\Gamma_0 \subset \partial\Omega \setminus \Gamma^1$, $\mathbf{S}(\phi, \mathbf{u}) \in \mathbb{R}^{d \times d}$ は第2 Piola-Kirchhoff 応力, $\mathbf{E}(\mathbf{u}) \in \mathbb{R}^{d \times d}$ は Green-Lagrange ひずみ, $\mathbf{S}(\phi, \mathbf{u}) = \phi^p \mathbf{C}^0 \mathbf{E}(\mathbf{u})$, p は正定数, $\mathbf{C}^0 \in W^{1,\infty}(\Omega; \mathbb{R}^{d \times d \times d \times d})$ は楕円性を満たす固定された関数, $\alpha \in L^\infty(\Gamma^1; \mathbb{R})$ は固定された正の関数とする。 ■

本研究では、次の結果を得た。

- (1) $J(\mathbf{u})$ の密度変動に対する一般化微分を求め、勾配の計算法を示した。また、勾配を用いた H^1 勾配法による上記問題の解法を示した。ただし、制約 $\phi_0 \leq \phi \leq \phi_1$ に対して、変数変換 $\phi = \phi_1 (\tanh \theta + 1) / 2$ を用いた。
- (2) 上記問題を解くための有限要素法を用いたプログラムを開発した。
- (3) 正常な脊柱から弯曲脊柱への写像問題に対して、 $J(\mathbf{u})$ がゼロに収束する結果を得た。

